

自然の中の子ども 子どもの中の自然

— 安曇野里山だより —

依田敬子

「紅葉、きれいだよね」と二人の子どもが話します。

「葉っぱが全部落ちたら、冬だよね」舞い落ちる木の葉の下を歩きながら、Hがおばあちゃんの言葉を思い出して言いました。「くじら雲」で過ごす子どもたちは、会話の中に自然物だけでなく、自然の移り変わりを表すことが多くなります。それは、子どもたちを成長させた環境がどんなもののかを表しているのだと思います。

人は一人ひとり感じることや考えることが違います。

子どもたちもそうです。同じ所で毎日を過ごしても、興味をもつことは違います。Tはずっと虫や小さな生き物

に興味をもっていました。最近、植物に興味をもち始めています。歩きながら、雑草を一本ずつ根っこから引き抜いて集めたり、種を集めたり、芽を出したどんぐりや小さなクヌギの苗木をプランターに植えたりしています。こんなふうに一人ひとりのペースで学んでいくことができたなら、どんなに意欲的に学ぶことができるでしょう。

「くじら雲」は、長野県安曇野市明科の押野山（標高約600m）を拠点に三〜五歳児20名程が活動をしています。

「くじら雲」がある押野山の頂上には桜の木が十本くらいあり、四月半ばごろに満開となります。この山では、

普段は地元でも限られた人しか見かけませんが、桜の季節の週末には珍しく観光客らしき人たちが来ます。その人たちは、この山の名前が押野山だとは知らず、遠くから頂上の桜色を見て訪れるのです。そんなどこか取り残されたような里山の中腹に、四十年前まで養蚕農家だった一軒の家があります。その古い民家が「くじら雲」の園舎です。ここに来る人は幼稚園というより「依田さんち」に来たという感じがすると言います。田舎のおばあちゃんちという雰囲気があります。実際に卒園児は「ただいま」と言ってきます。そんな時は、私も久しぶりに孫に会うおばあちゃんになった気分です。

春は、毎朝焚き火をして、子どもたちを迎えます。リュックサックと長靴姿の子どもたちが家族と一緒に駐車場から畑の横を通って歩いてきます。

夏は、川や溪谷で一日を過ごします。

しだいに体力をつける子どもたちは、秋から冬にかけ

て押野山のふもとから「くじら雲」まで片道約2kmの山道を歩いて往復します。

「くじら雲」の保育の特徴は、少人数で異年齢の集団ということ、親参加型ということ、日常的に野外を中心とした活動や昔ながらの里山生活をするということです。

「くじら雲」では、雨が降ってもレインコートを着て、山道を歩いたり、外で過ごしたりします。あまり雨が強い時は、お弁当を屋根の下で食べることがありますが、子どもたちはいつも通り、鬼ごっこやままごとをして遊んだり、雨の日ならではの遊びを楽しんだりします。あつる時、工事に興味をもっているCが泥んこになって遊んでいました。昼食の前に着替えをしようと土間で汚れた衣服を脱ぎました（土間には薪ストーブがあり、肌寒い時は重宝しています）。そして、土間にある流しで泥んこの手を洗ってあげました。すると、Cが「依田さんちは、いいね。土間に水道があつて」と言いました。何気ない会話ですが、私はこの言葉から、Cがここを「おうち」

だと思っていることと、Cの中に土間の生活が存在し始めたことを感じ、うれしく思いました。

このような昔の生活を子どもたちとしているのが、「くじら雲」です。子どもたちの家族も参加したい時に参加しています。

Sは年少の秋から「くじら雲」へ来るようになりました。姉が年長にいたので、以前からたびたび「くじら雲」に参加していました。しかし、毎日、年長や年中の子たちと同じようにリュックサックを背負って山道を登ることは初めての経験でした。体力的な負担を軽くするためにリュックサックを代わりに持つてあげようと提案しますが、「いい」と言つて頑張る姿が見られました。そして、姉たちの足取りについていこうと後から小走りに行くのでした。そうやって毎日、北アルプスの山々を眺めながら田んぼのあぜ道を通り、山道の木々の中を歩いて行きました。そのコースは車の通行が少なく、のんびりとそれぞれのペースで歩くことができます。



冬になるころ、Sは姉たちの集団から離れ、私と手をつないで歩くようになりました。歩きながら、日々の思いを話すようになりました。ある時は「今日、パパに怒られた。もつと寝ていたかったのに」と言いました。別の日「ママ、東京に行ったんだよ。夜にならないと帰ってこないんだ。夜、ご飯、食べられないと思う？ でも、大丈夫なんだよ。パパが作ってくれるんだ」。そうした毎日を通じて「今日、お弁当、一緒に食べよう」と私に言うようになりました。「くじら雲」ではお弁当を好きな場所で好きな友達と食べるのです。

そんなある日、「くじら雲」に参加していた妹や弟たちの遊んでいた雪の玉がSに当たりました。その時、Sは「くじら雲」へ来て初めて泣きました。いままでの緊張の糸が切れたようにしばらく抱っこされながら、泣いていました。それ以来、Sは自分のペースで過ごすようになりました。年の近い子たちと一緒に遊ぶようになりました。ソリやスキーで遊んだり、雪の上に座って、両腕で雪を小さな山のように集めて「これはゆみちゃんち、これは依田さんち、これはやまんばのうち」と名前をつけ、向かい合って座っていた子と、雪の家の取り合いっこを楽しんだりしました。

「くじら雲」の子どもたちも、いろいろな家庭環境をもっています。そして毎朝うれしい気持ちや悲しい気持ち、いらだつ気持ちなどいろいろな思いをもつて来ます。山を眺めたり、雪の上を歩いたり、まっぼつくりを拾ったりして歩いていくと、一日のうちの朝だけでも子どもたちの言葉や語調に変化を感じます。何を言っても「やだ」と、反発していた子が「だって、早帰りしたく

ないんだもん」と素直に自分の思いを話すようになります。Sのように自分の思いを理解してもらえなかった切ない思いを話す子もいます。山を上がるにつれて笑い声が増えていきます。人の言葉を含めた音が氾濫する環境の中でなく、静けさの中で過ごすことで人は自分の心に向き合い、自分を肯定していくのかと思います。

元気がない子どもの姿を見ると、「どうしたの」と理由を尋ねることがあるかもしれません。励ますこともあるかもしれませんが。そのような時、「くじら雲」では黙って一緒に山道を歩きます。その子がかかわりを求めてきたらすぐに受け入れられるように様子を観察しています。手を握ってきた子の手や横顔からその子の気持ちを感じます。気持ちや思いを言葉で正確に表すことは難しいことです。特に子どもたちは限られた言葉の中で表します。だから、子どもの言葉だけでその子の状況を理解しようとせず、その子の背景を考えて理解しようと努めます。

Hは「くじら雲」に年少で入園しました。入園したば

かりのHは「くじら雲」の子どもたちに対し「おはよう」の代わりに、戦いを挑むかのような構えをしました。Hと一緒に遊ぼうと子どもたちに近づいていっても、その子たちがHの思いに沿わないと、相手を押したり、物でたたいたりしてしまう姿が見られました。そのようなHの姿を観察していくと、Hが押したり、たたいたりする理由がわかりました。そこでHのそばに何となくいて、Hが近くの子を押そうとしたり、たたこうとしたりする時は、それを止め「○○したいの?」と尋ねました。Hが「うん」とうなずくと「○○したいって言ってごらん」と知らせました。Hはその通り相手に伝え、少しずつ言葉で伝えることが増えていき、たたいたり、押そうとしたりする回数は減ってきました。しかし、その姿は入園してから一年半以上続きました。そのたびに「Hちゃんの手はたたくためにあるんじゃないよ。握手したり、い子ってするためにあるんだよね」と手を握ったり、抱っこしたりしながら言いました。そうしていくと「Hちゃんの手はどういうふうにするためにあるの?」と聞

くと「握手したり、いい子ってするため」と答えるようになりました。

そのうち、Hは甘えてくるようになりました。Hは三歳でしたが赤ちゃんのようにおんぶひもでおんぶをしてほしがりました。Hが「降りる」と言うまでおんぶをする日が続きました。一年目の秋ごろ、Hは何かあると泣くようになりました。それまでのHは泣けなかったのです。泣きたい時は誰かに怒りをぶつけていました。

一年目が終わろうとする三月にみんなで竹やわらを使つて小屋を作りました。完成するころ、Hがその小屋を独り占めして、ほかの子を追い出そうとしました。するとほかの子たちがHに文句を言いました。Hは怒つて文句を言う子を押し始めました。そして取っ組み合いのけんかになりました。大きい子が一対一で取っ組み合いをするよう審判の役目をしました。ところが二人とも泣いてしまいました。大きい子は話し合いをすることにしました。すると「みんなのうちだから、独り占めはいけな」と思う」という意見が多く出ました。それを聞いたHは

怒ってその場を離れ、近くの木に登ってしばらくみんなの様子を見ていました。ほかの子たちはHをよそにその場で過ごしていました。しばらくして、Hは「さつきはごめんね」とみんなに言ってきました。みんなは「いいよ」と言い、Hを受け入れました。

人に傷つけられるのを怖れていたHが、かたくなな心を徐々にほぐし、自分の思いを素直に出すようになっていきました。そうできたのは、保育者のかかりだけでなく、子どもたちの保護者が保育者同様Hの思いを理解しようとしたからだと思います。Hはたくさん大人のかわいがられ、人を信頼していったのです。大人がどのように子どもを理解するかで、子ども同士の関係も変わってきます。誰かを傷つけようとする子どもはいません。もし、そうする子がいたなら、その子はもっと傷ついているのだと思います。

Hが「くじら雲」で過ごして二年目の二月のことでした。一月から入ったばかりの年中児Jと年長児Tがけんかをして、Jが泣いてしまいました。Hはそのけんかを

見ていて、心配そうにJのそばにいて声をかけていました。しかし、Jは何も言いませんでした。すると、Hは私の所へ「Jくんが泣いてる。Tくんが怒った」と知らせにきました。Hがそのように困っている友達のことを知らせてきたのはそれが初めてでした。また、別の日、Hが道に手袋を置くと、それを知らずにほかの子が踏んでしまいました。Hは「手袋、置いてあるんだから、踏まないで」と言いました。当たり前のことですが、自分の思いを言葉で伝えることができた私はうれしくなりました。

自然は子どもたちの感覚を育てるのによい環境です。自然の中で過ごしていると気持ちも安定してきます。しかし、子どもたちが安心して心を開き、素直に表現することができるのは、大人がどのようにそばで寄り添うかによります。子どもの成長には自然と共に子どもにも信頼される大人の存在が必要なのだと思います。

(NPO法人 響育の山里 くじら雲代表)